

- 明治30年代は、言論の大らかな時代だった
  - ▽与謝野晶子が「君死にたまふこと勿れ」と歌い新聞や議会在軍の作戦ミスを非難攻撃した
  - ▽それまでは凄まじい弾圧と抵抗の歴史
- 慶応4年は、日本の近代新聞誕生の年
  - ▽戊辰戦争で天下は官軍・幕軍に二分され人々は争ってニュースを求めた
  - ▽江戸時代庶民のニュース伝達機関は「瓦版」江戸 京都 大阪 長崎にニュース新聞創刊発行は3～5日ごと 木版彫刻刷り
  - ▽官軍が江戸へ入る(4月11日)と 佐幕派新聞ばかり新政府は書籍出版物の許可制布告(4月28日)
  - ▽威令が徹底せず 6月8日 新聞の私刊を禁止新聞は江戸からほとんど姿を消した
- 「明治改元」(9月8日)、明治の幕が開かれた
  - ▽新政府の悩みは流言蜚語 政策も徹底せず
  - ▽2年2月8日 新聞紙印行(印刷)条令を發布進んで新聞発行を許可 政府・新聞の「蜜月時代」

「御用新聞」  
 政府は情報を優先的に提供、政府奨励金を給付、官庁・官吏に講読を奨励し買い上げて府県配布の優遇措置をとった。新聞にとっても「政府御用」は世間の信用を集める何よりの看板。東京日日新聞(購田)は7年10月「太政官御用」を命じられると、一面トップで伝えたほど、政府の上意下達の一翼を担うことを誇りとした。

- ▽廃藩置県(4年7月14日) 3府402県に福沢諭吉は友人への手紙に「一身にて二生を経るが如し」
- ▽大蔵卿大隈重信は「改暦」を断行5年12月3日→6年1月1日に欧米は太陽暦 太陰暦では商取引など不便それ以上に新政府の 苦しい台所事情

大隈は回想している(大正9年) .....  
 「太陰暦で閏の年といえは一年分の定まった

与謝野 晶子(よさのあきこ)  
 明治11(1878)～昭和17(1942) 大阪・堺生まれ。明治34年歌集「みだれ髪」出版、与謝野鉄幹と結婚。日露戦争に「君死にたまふこと勿れ」を発表し論争に。文化学院で教鞭をとり教育・婦人・社問題にも活動。「新訳源氏物語」全4巻を出版

新聞紙印行(印刷)条令 .....  
 一、新聞紙ハ人ノ知識ヲ啓開スルヲ目的トスベシ  
 一、人ノ知識ヲ啓開スルハ頑固偏隘ノ心ヲ破リ文明開化ノ域ニ導カントスル也

福沢 諭吉(ふくざわ・ゆきち)  
 天保5(1834)～明治34(1901) 豊前中津藩出身。安政5年藩命で江戸で英学を学び、幕府遣外使節に3度随行して欧米を視察。明治1年慶応義塾創設。著に「西洋事情」「学問のすゝめ」。15年時事新報を創刊して論陣を張った

大隈 重信(おおくま・しげのぶ)  
 天保9(1838)～大正11(1922) 佐賀・鍋島藩出身。長崎で蘭学・英学を学び、明治3年参議。6年大蔵卿となり、太陽暦、七曜制を採用。「14年の政変」で免職。翌年立憲改進黨総理、東京専門学校(購大)を創立。21年伊藤内閣外相。黒田内閣に留任し、条約改正交渉中、爆弾を投げられ右足を失う。松方内閣外相経て、31年板垣退助と憲政党結成、政党内閣を組織。大正3年再び首相。第1次大戦で対独参戦

旧暦・新暦切り替えて .....  
 ・徳川時代のしきたりを懐かしがる声も。「昨日は師走の朔日だというのに、3日にはもう正月が来る。1日で30

高を十三分して月に当てはめねばならなかつたから、月に見るとどうしても不足を逃れられないわけだろう。これに閏年は二年半毎にやってくるのだ。官吏の月給の如きはその年はやはり十三カ月与えなければならぬだろう。仕方がないから二年ずつ貯金しておいてはその年の用意にあてたりしたものだがこれは随分うるさい。…明治六年がまたしても閏だったから早くその年が来ない間というので、いそいで改暦実行したわけさ。今日のように社会組織が秩序立っては中々一寸の改革も困難である。寧ろ不可能かも知れんが、あの当時の如き過渡期なればこそどさくさ紛れ、何でも彼でも改革変更が実行出来たのであろう

(早稲田大学大学史編集所「大隈侯座談日記」)

大隈は9年3月には七曜制を採用、官庁を日曜全休、土曜半休とする。若い頃に米宣教師フルベッキに学んだので、西洋流改革をやると「耶蘇くさい」と非難されたという。

日の働きをせねばならぬのか」

・(兼田) 備中の国にて或る商人むすこに婦を娶らんとて兼てより婚礼は九月某の日と定め置きしが 女の方には其日を待ちつけて支度をととのへ遙々と数里の道を来りしに 何ぞ計らん婿の方には戸をさして沈まりかへって音もなし 只いびきのみ高瀬舟ひくにひかれぬ此場しのぎに間違ひにはよもあらじと戸をたゞけば何事ならんと小言たらだら起出て門の戸開けばこはいかに 提灯あまた灯しつれ新婦の来るに驚駭したれど返すといふは忌詞と眉間の皺をのしこんぶ俄に用意ととのへて三々九度や四海なみ静に事は納てぬといふ蓋し甲は旧暦によりて約し乙は新暦にて来りしなん

- 明治維新は「コミュニケーション革命」でもあった
- ▽ 明治5年 東京—大阪間に電信開通(4月20日)
- 郵便制度(7月1日) 新橋—横浜間鉄道開業(9月13日)
- ▽ 6年 徴兵令布告(1月10日) 常備軍制度確立
- 開化から取り残された 士族の動向が険悪に
- 地租など 負担増大を強いられた 農民の間で
- 「働き手まで奪うのか」と 農民一揆
- ▽ 政府は 新聞紙発行条目を公布(10月19日)

重視したのは形式的な第五条

- 第五条 毎号印行ノ年月日印行ノ地名編輯者印刷者ノ苗字名及号数ヲ記スヘシ
- 第十条 国体ヲ謗リ国律ヲ議シ及ヒ外法ヲ主張宣説シテ国法ノ妨害ヲ生セシムルヲ禁ス
- 第十一条 政事法律等ヲ記載スルコトニ付妄ニ批評ヲ加フル事ヲ禁ス

- 7年1月17日、政府・新聞が一辺に対立関係に
- ▽ 板垣退助ら8人の「民撰議院設立」の建白書

フルベッキ (Flidolin Verveck)

1830~1898 オランダ生まれ米宣教師。安政6年長崎に来日、幕末指導者多数を教育した。明治2年大学南校教頭となり政府に助言、岩倉使節団派遣提案。19年明治学院創立に参加、教授。東京で死去

珍談・奇談も

・(兼田) 横浜より府下島原跡守田座の芝居を見物に来る朝八字頃電信を以て棧敷或は土間の約束をなし置やがて八字の汽車にて新橋迄来り夫より守田座へ到るに大概九字頃なり行程八里外を来るに却て府下神田辺より来る者よりは早しと 又打出し後は夕車に乗して横浜へ帰れり其自在実に驚くべく感すへき事なり

・東京見物に出てきた田舎紳士が辻々に柱箱が立ててあって、白字で「郵便」、投函口には「差入口」。これを「垂れ便」便所と間違え、それにしては差入口が狭いと考え込んでしまった。

▽板垣は 愛国公党を結成

藩閥政治を「有司専制」と非難 人民参政権主張  
人民から選ばれた 人民代表による立法機関  
志を同じくする者が 党派を立て 国民に訴えた

▽新聞の 反政府言論活動の序幕に

早期議会開設要求 自由民権派の新聞が続々と

— 五箇条の御誓文(慶4年3月14日) —

広ク会議ヲ興シ万機公論ニ決スヘシ

▽自由民権論は「天の声」として 全国へ

..... 大(誌)新聞・小(誌)新聞 .....

大新聞は政論活動中心、小新聞は娯楽読み  
物新聞。読売新聞(明治7年11月創)は小新聞の代  
表格。漢字に振り仮名をつけて読みやすく、  
「俗談平話」を編集方針。末尾に「是だから虚  
は顕はれ易いものに違ひありません」とお  
説教をつけ、1枚8厘月10銭の安さで受けた。

大阪朝日(12年1月創)も「勸善懲悪ノ趣旨ヲ  
以テ専ラ俗人婦女子ヲ教化ニ導ク」と宣言、  
やはり小新聞からのスタートだった。

▽大新聞も 急進的な民権派新聞と

政府支持 漸進的な官憲派新聞とに

●民権派新聞に対する弾圧は激しくなった

▽8年6月28日 新聞紙条令 讒謗律(ざんぼうり)

初めて 罰則規定を設け

政府批判の記者を投獄 新聞を発行禁止・停止に

▽「新聞記者恐怖時代」の 到来だったが...

▽東京・横浜の記者は 讒謗律1周年(9年6月28日)に

浅草寺で 新聞供養と称して「大施餓鬼会」

「禁獄屁の如し」「禁獄平左衛門」と 政府攻撃

▽内務省に「国安妨害」で 発行禁止・停止の処分権

— 太政大臣布告(明治9年7月5日) —

新聞雑誌雑報ノ国安ヲ妨害スト認メラレルモ  
ノハ内務ニ於テ其発行ヲ禁シ又ハ停止スヘシ

▽評論新聞は

「国安の二字が特に官吏の安寧のみを指すもの  
なら又何をか云はん」たちまち 発禁処分に

・電信(レガフ)は遠くへ物を運ぶと、  
弁当箱を電線に結んだり・いつ電報  
が電線を通るかと思弁当持参で一日  
中見張っていたとか。

板垣 退助(いたがき・たいすけ)

天保8(1837)～大正8(1919) 土佐藩出  
身。戊辰戦争で総督府参謀。新政府参議  
となるが征韓論争に敗れ下野。明治7年  
愛国公党を興し民撰議院設立建白書を  
提出、自由民権運動の先駆となる。14年  
自由党を結成、総理。15年刺客に襲われ  
負傷。29年伊藤内閣内相。31年改進黨と  
合流し憲政党を組織、初の政党内閣第1  
次大隈内閣内相(慶納閣)。33年政界引退

— 民撰議院設立建白書 —

「臣等伏シテ方今政権ノ歸スル所ヲ  
察スルニ上帝室ニ在ラス下人民ニ在  
ラス而独有司ニ歸ス夫有司上帝室ヲ  
尊フト曰ハサルニハ非ス而帝室漸ク  
其尊榮ヲ失フ下人民ヲ保ツト云ハサ  
ルニハ非ス而政令百端朝出暮改政情  
実ニ成リ賞罰愛憎ニ出ツ言路壅蔽(言  
論を礙る)困苦告ルナシ夫如是ニシテ天  
下ノ治安ナラン事ヲ欲ス三尺ノ童子  
モ猶其不可ナルヲ知ル因循改メス恐  
ラクハ国家土崩ノ勢ヲ致サン臣等愛  
国ノ情自ラ已ムコト能ハス乃チ之ヲ  
振救スルノ道ヲ講求スルニ唯天下ノ  
公議ヲ張ルニ在リ天下ノ公議ヲ張ル  
ハ民撰議院ヲ立ルニ在ルノミ...

— 讒謗律 —

日本初の名誉毀損法。役人の批判は一  
切許さないという役人のための法律で  
禁獄7日以上3年以下、罰金も3円以上千  
円以下。評論新聞は半年の間に記者18  
人が禁獄、読売も編集長が毎月罰金5～  
20円。(13年7月17日 刑法布告で廃止)

▽西南戦争(明治10年2月～9月)で

武力で政府打倒の動きは収まったが  
民権運動は士族の不满を吸収 勢いを強めた

●14年10月12日、勅諭で「23年国会開設」約束  
▽新聞の「北海道官有物払下げ事件」キャンペーン

北海道官有物払下げ事件

政府は、北海道開拓に10年間に1500万円投じてきたが、財政上の理由と、支出金の期限が切れることもあって、北海道開拓使を廃止、事業を民間に移すことにした。薩摩出身・開拓使長官の黒田清隆は同郷の五代友厚らが経営する関西貿易商会に「39万円無利息30年年賦」で払下げることにしたが、東京横浜毎日新聞が7月26日、「関西貿易商会ノ近況」と題し暴露した。

▽新聞も世論も「藩閥政治の弊害」と非難

民権派は全国各地で反対演説会 政府を攻撃

▽1年間で 演説会解散131件 禁止40件

記者罰金182件 禁獄15件

新聞の発行停止・禁止46件

明治14年の政変

大隈重信が3月「15年憲法制定、16年初めには国会を開く」の意見書を出し、漸進論の伊藤博文との対立が表面化していた。政府攻撃をしているのは大隈と親しい福沢諭吉の慶応義塾系が多く、払下げ反対の大隈が意図的に洩らしたのではないかと噂も出ていた。

薩長参議の間で大隈追放の密議が成立し、10月11日、明治天皇が東北・北海道巡幸から帰京されると深夜の御前会議を開き、大隈罷免、また民権派の火の手を収めるため官有物払下げ中止、23年の国会開設を決定した。

▽言論機関が政局を動かした 最初のケース

東京横浜毎日「実ニ我三千五百万余人ノ  
人民ガ首ヲ延テ希望シタルノ達書ナリ」

●板垣の自由党、大隈の立憲改進黨など、政党が次々と組織され、新聞もほとんどが政党機関誌の様相

黒田 清隆(くろだ・きよたか)

天保11(1840)～明治33(1900) 薩摩藩出身。五稜郭の戦いで戦功を立て中将。明治3年開拓使次官、7年参議兼長官。北海道開拓の基礎を築く。この間4年には女子留学生を米に派遣。20年農商務相。21年第2代首相に就任したが、条約改正交渉に失敗し辞任。28年枢密院議長

五代 友厚(ごだい・ともあつ)

天保6(1835)～明治18(1885) 薩摩藩出身。長崎海軍伝習所に学び慶応1年渡欧して武器・船舶・紡績機械を購入して帰国。維新後は外国官権判事、大阪府判事を歴任。明治14年関西貿易商会設立。関西実業界の大立者として、株式取引所、大阪商法会議所などを設立、「大阪の恩人」と呼ばれた

黒田の思惑は…

民間に移しても事業の継続には、北海道に精通した者でなければダメだと、黒田の下で大書記官をした2人の経営する「北海社」にやらせようとしたが、役人出身で資本がない。北海道の物産を清国に輸出したいという関西貿易商会に払下げることにした。

1500万円は、開拓使開設以来の所要国費であって払下げ物件の価格ではない。物件の見積りは38万7082円1銭7厘。毎年の事業決算も赤字であり、民間にやらせるには保護奨励の優遇策が必要だと思ったのだ。

伊藤 博文(いとう・ひろぶみ)

天保12(1841)～明治42(1909) 長州藩出身。参議兼工部・内務卿となり明治18年初代首相。内閣制度、憲法制定など国家体を制整備。元老として4次の内閣を組織し、枢密院議長3度。38年韓国統監。ハルビンで安重根に暗殺される

- ▽自由・改進黨派の新聞を 発行禁止で弾圧
- ▽板垣が 岐阜で 刺客に襲われ重傷(15年4月6日)
  - 「我死すも自由は死せず」民権運動の合言葉に
- ▽高知新聞は発行停止5度 その都度 身代わり新聞社告で「イヤハヤ出たり引込んだり 事忙しき事にぞある」 6回目は 発行禁止
- ▽高知自由新聞(鯉ヶ淵)は 黒棒の死亡広告を出し 盛大な新聞葬で抗議
- ▽16年4月16日には 新聞紙条令改正 発行保証金制度新設で 廃刊が続出 身代わり新聞の発行も 禁止され 新聞の反政府運動は 急速に 衰えていった
- ▽政府は7月2日「官報」を創刊
  - 「其主義政道ヲ明ニスル」世論の指導機関
- ▽内閣制度創設(明治18年12月22日) 初代首相に伊藤博文

●不平等条約(蹙の五約)改正運動に火を点けたノルマントン号事件キャンペーン

ノルマントン号事件

明治19年10月24日、横浜から神戸へ向けて出航した英貨物船ノルマントン号が暴風雨のため紀伊半島沖で遭難沈没。船長など英人船員、外国人乗客27人はボートで脱出したが日本人船客23人は全員水死した。

治外法権で日本には裁判権がなく、神戸の英領事館予審でドレーク船長は無罪になった。

- ▽「国辱問題」と 世論は沸騰した
- ▽東京日日で 名文記者 福地桜痴が
  - 「外人は日本人乗客を処すること荷物の如し」
  - 大阪朝日も 主筆織田純一郎が 裁判を傍聴 一問一答の詳細を 紙面で特集した
- ▽内務省は 轟々たる世論に押され 兵庫県知事に ドレーク船長を 殺人罪で告訴させ 横浜の英領事館裁判で 禁固3か月(12月9日)
- ▽鹿鳴館(明治16年11月脱獄)では 連日のように 舞踏会 しかし 改正交渉は 失敗の連続だった
- ▽沈滞していた民権派は 大同団結を訴え 各地から 壮士が 地租軽減 言論集会の自由 外交政策の建白書を持ち上京 騒然としてきた

高知自由新聞の死亡広告

明治15年7月15日付「五回死ヲ決シテ未タ死セズ終ニ六回至ツテ漸ク死矣年三百又二十三ニシテ命ヲ知ル命ナル哉命ナル哉天命將タ那辺ニ在ルカ観官(諸君)自ラ撰焉」

16日には新聞葬を行なったが、忌中笠を被った各社の壮士が4列になり、編集長が新聞紙を張り巡らした位牌を持ち、配達人4人が棺を担いで記者や株主が麻袴で随行、「後に続く葬送人は2727人」と伝えている。

「新聞紙撲滅法」

記事の責任は、書いた記者と編集人だけだったのを新聞の持ち主にまで広げた。新聞社は監獄入り専門、形だけの発行名義人を金で雇った。

時事評論を報道する新聞は、発行保証金を東京千円、京都、大阪、横浜、神戸、長崎700円、その他の地方で350円納めなければならなくなり東京では83社中32社が廃業を届け出た。

福地 桜痴(ふくち・おうち)

天保12(1841)～明治39(1906)長崎県生まれ。本名源一郎。幕府通訳として欧米を回り、慶応4年江湖新聞を発行したが幕府を擁護したため発禁投獄。明治4年岩倉使節団に随行。7年東京日日主筆となり政府支持の立場で民権論批判の筆をとる。名文記者で知られた。東京府会議長を経て、37年衆院議員。歌舞伎座創立に参加、「春日局」などの脚本を書く

織田 純一郎(おだ・じゅんいちろう)

嘉永4(1851)～大正8(1919)京都府生まれ。明治3年渡英しエジンバラ大で法律を専攻、10年帰国。文筆生活に入ったが18年大阪朝日に迎えられ主筆

●政府は20年12月26日、保安条令を公布、民権派の大弾圧に乗り出した

▽秘密の結社・集会を禁じ 屋外の集会運動を制限  
危険人物には 皇居から3里外に 退去を命ずる

▽警視總監三島通庸も 躊躇したというが

内務大臣山県有朋は「ここで一步退けば  
收拾がつかなくなる」と 断固 実行させた

— 尾崎行雄も追放令570人の一人 —

東京府議をしていた尾崎は「三里というのは直径をいうのか、半径をいうのか」と食ってかかり、警察官から「説明の限りに非ず」と怒鳴られ、「学堂」の号を驚愕の「愕堂」に改め、欧米の旅に出た。(のち「罅堂」に改める)

▽28日には 新聞の発行停止を 内相の専決処分に

●明治の言論は、弾圧と抵抗の中で育った

▽言論界の主流は 福沢諭吉の時事新報(船15年3月創)

「独立不羈(ふき)」「何ものにも縛られない

不偏不党」を旗印に 知識人の信頼を集めた

▽憲法発布(船22年2月11日)の日 陸羯南が新聞「日本」

翌年には 徳富蘇峰の国民新聞(23年2月)

個人の思想 個性を反映した新聞が 登場する

▽陸は 発刊の辞に「国民精神の回復発揚を以て

自ら任ず」「日本」からは 一流の言論人が輩出

三宅雪嶺 池辺三山 鳥居素川

長谷川如是閑 丸山幹治 正岡子規 古島一雄

●憲法発布が、新聞の速報合戦の始まり

…… 国民はお祭り騒ぎ(読新欄2月8日付) ……………

「憲法祭に付去る五日ごろより国旗の値段が一日増に十四五銭づつ騰貴したるのみならず下町の旗屋は昨今大小とも大抵売切れ中位の品はあれども品切と称へて売控の姿なり」

▽内容は 発布まで 一切秘密

東京日日 朝日は 号外を発行して 速報した

— 村山竜平社長が「報道の朝日」の基盤 —

村山は、宮中正殿の式典で憲法全文を受け取ると、門外に待たせておいた社員に手渡す。社

三島 通庸(みしま・みちゆ)

天保6(1835)～明治21(1888) 薩摩藩出身。明治15年福島県令。道路掘削工事で反対する福島自由党を弾圧「福島事件」を起こす。翌年栃木県令兼務。18年警視總監となり、保安条令で民権派を追放

山県 有朋(やまがた・ありとも)

天保9(1838)～大正11(1922) 長州藩出身。陸軍大将・元帥。明治6年陸軍卿となり軍制、徴兵制を確立。18年伊藤内閣内相。22年首相。枢密院議長を経て日清戦争で第1軍司令官。31年再び首相に就任し、軍部大臣現役武官制を実施した。日露戦争では参謀総長。元老として長州閥を率い、陸軍、政界に君臨した

尾崎 行雄(おざき・ゆきお)

安政5(1858)～昭和29(1954) 神奈川県生まれ。明治23年の第1回総選挙以来連続当選25回。文相、東京市長、法相歴任。大正2年の護憲運動で先頭に立ち「憲政の神様」と称される。昭和27年代議士生活63年の記録を樹て、国会から「名誉議員」の称号を贈られ、没後憲政の功績を讃えた尾崎記念館が建てられた

陸 羯南(くが・かつなん)

安政4(1857)～明治40(1907) 津軽藩出身。明治14年官吏となったが、条約改正をめぐる欧化主義政策に反対して退官し、22年「日本」を創刊。国民主義を唱え社長・主筆として健筆を揮う

徳富 蘇峰(とくとみ・そほう)

文久3(1863)～昭和32(1957) 熊本県生まれ。本名猪一郎。明治23年国民新聞を創刊、平民主義を唱えたが、日清戦争後から国家主義に。昭和18年文化勲章。戦後公職追放。著に大正7年から生涯をかけた「近世日本国民史」全50巻

員は人力車で社へ戻り、号外を発行。さらに数人の社員に命じて全文を電報用紙に書き写させ、大阪朝日に打電させた。仮名書きで打電字数1万1300余、電報料金121円37銭。電信局員は余りの字数の多さに悲鳴をあげたという。

また国会開設(明治23年11月29日)に備えてマリノ二輪転機を導入した。平版ロール印刷機は1時間に4万新聞1500枚の能力だったが、8万新聞3万枚。新聞印刷の大革命で村山の英断だった。

「小新聞の雄」読売は30年1月から尾崎紅葉の「金色夜叉」を連載、人気を博すが、ニュース報道に遅れをとり、文学新聞として低迷する。

●「簡単、明瞭、痛快」をモットーに、殴り込みをかけてきた黒岩涙香の万朝報(明治25年11月創刊)

▽万を数える朝で 長く続く新聞を表わし

この新聞を読めば よろず重宝する

▽涙香は 宣言した「万朝報は一種の勇気を以て生まれたる新聞なり、弱者を扶くるに躊躇せず。弱者の機関」 売り物は「勇み肌」の三面記事

…… 吹き荒れた「赤新聞旋風」 ……………

「まむしの周六」と異名をとったように「蓄妾の実例」など暴露記事で上流階級、支配階級を執拗に攻撃した。しかも目立つように、薄いピンクの紙を使った。伊藤博文は「あれは赤新聞だ」と軽蔑しながらも、たくさん届く新聞の中から真っ先に目を通したという。

庶民には痛快な新聞だった。雲の上のスクヤンダルが書いてあり、欲求不満のはげ口に。しかも1部1銭(購2銭5厘 郵1銭5厘)の安さが受けて、10年足らずの間に15万部と東京一の新聞に。

— アメリカではイエロー・ジャーナリズム —

1890年代のニューヨークで、ピューリッツアのワールド紙とハーストのジャーナル紙が黄色い服を着た少年の登場する漫画「イエロー・キッド」を奪い合って載せたことから、扇情的な記事売り物にする新聞をいう。

三宅 雪嶺(みやけ・せつれい)

万延1(1860)～昭和20(1945) 金沢市生まれ。早大講師を経て明治21年、国粹主義に立つ雑誌「日本人」を創刊。22年、陸の「日本」に抛り、中央公論などに多彩な論文を発表した。昭和18年文化勲章

正岡 子規(ましか・しき)

慶応3(1867)～明治35(1902) 松山市生まれ。新聞「日本」を主舞台に俳論、句作や随筆を発表、近代俳句に業績を残す。明治29年からカリエスによる長い病床生活に入ったが「墨汁一滴」「仰臥漫録」「病牀六尺」など優れた随筆を発表した

村山 竜平(むらやま・りゅうへい)

嘉永3(1850)～昭和8(1933) 三重県生まれ。西洋雑貨店を経営していたが、明治12年大阪朝日創業に参加し社主、社長。21年「めざまし新聞」を買収し東京朝日と改題。輪転機を導入、新聞の大衆化を図り、朝日の基礎を築く。23年衆院議員

尾崎 紅葉(おざき・こうよう)

慶応3(1867)～明治36(1903) 江戸生まれ。本名は徳太郎。明治22年東大在学中に読売に入社、文芸欄を担当。30年から明治随一の人気作品「金色夜叉」を長期連載したが、死により未完に終わる。泉鏡花、徳田秋声ら多くの後進を育てる

黒岩 涙香(くろいわ・るいこう)

文久2(1862)～大正9(1920) 高知県生まれ。本名周六。大阪英語学校に学び都新聞などに外国小説を翻訳、翻案し発表。明治25年万朝報を創刊し、暴露記事、新機軸で人気を集めた。翻訳小説の「鉄仮面」「巖窟王」「噫無情」は、長い間読書界を風靡した

●日本の公害問題の原点、「足尾鉍毒問題」追及に生涯を賭けた田中正造

▽議会(24年12月18日)に

「足尾銅山鉍毒加害問題に付質問書」を提出  
演壇で 第一声を挙げた

#### 木下尚江は書いている

魚が死んで漁業が絶える。藁火を焚けば銅糞が残る。大きな若竹が根こそぎにされる。奇怪千万な事実を沢山並べ立て、腕を振り廻はす。目をムキ出す。破鐘のやうな大音声。奔放、熱烈、細心、堅固、滑稽、諧謔、悪口、雑言 — 千丈巖頭の雄獅子。一場の雄弁。「鉍毒問題」「田中正造」二つの名が一つになって、大風の如くに全国を動かした。  
(「田中正造」から)

▽当初は 天衣無縫な人柄で 名物議員として話題に  
「栃木鎮台」とか「栃鎮」の ニックネームで

#### 世論を動かした天皇への直訴

明治34年12月10日、帝国議会の開院式に出られた天皇の馬車が帰途についた時、黒の綿服、黒縹子の袴、足袋はだしの男が、人垣の中から手に書状をかざして「お願いがあります」と飛び出してきた。田中だった。騎兵に遮られ麹町署に連行されたが、翌日「狂人」として放免に。

#### 「謹奏」と表書された直訴状

草莽(そうもう)の微臣田中正造、誠恐誠惶頓首(せいこうとんしゅ)頓首謹デ奏ス。…伏テ望ラクハ陛下深仁深慈、臣ガ至愚ヲ憐ミテ、少シク乙夜ノ覽(いつよのらん=唐の文宗が民間政務に多忙のため夜10時過ぎから読したことを、転じて天子の書観を云う)ヲ垂レ給ハン事ヲ  
悲惨な被害を訴え、責任は政府にあるとして  
臣六十一、而シテ老病日ニ迫ル、念(おも)フニ余命幾(いくば)クモナシ …伏テ望ラクハ聖明矜察(きやうさつ)ヲ垂レ給ハン事ヲ。臣痛絶呼号ノ至リニ任(た)フルナシ

▽執筆者は 万朝報の論説記者 幸徳秋水

▽新聞は 一斉に「鉍山即時停止」のキャンペーン  
東大 早大 慶大 明大で「学生鉍毒救援会」

田中 正造(たなか・しょうぞう)

天保12(1841)～大正2(1913) 栃木県生まれ。明治12年栃木新聞創刊、翌年栃木県議。県令三島通庸の土木工事に反対、投獄される。23年衆院議員(選3回)。足尾鉍毒問題を追及、34年には議員を辞職、天皇への直訴を試みた

#### 足尾銅山

明治10年、官営の銅山が古河市兵衛に払下げられた。13年以降、急速に生産を伸ばし30年の銅生産高は6千ト、全国の3割を占めた。この銅山に水源を持ち関東平野を南東に流れて利根川に合流する渡良瀬川は、灌漑用水、魚の供給源として沿岸の生活を支えていた。13年頃から異変が起き始め、魚が死に絶え、栃木・群馬両県にまたがる1400㊦余りの農地は不毛の砂漠に。洪水が鉍毒被害に輪をかけた。

古河 市兵衛(ふるか・いちべゑ)

天保3(1832)～明治36(1903) 京都府生まれ。小野組生糸買付主任を務め、小野組破産後独立して鉍山経営に乗り出し銅山12、銀山8、金山1。鉍山王と呼ばれ、古河財閥の基礎を固めた

木下 尚江(きのした・なおゑ)

明治2(1869)～昭和12(1937) 長野県生まれ。小説家、思想家、社会運動家。明治32年毎日新聞入社、廃娼運動・足尾鉍毒事件を論評。日露戦争で非戦論を展開

幸徳 秋水(こうとく・しゅうすい)

明治4(1871)～明治44(1911) 高知県生まれ。本名伝次郎。明治31年万朝報論説記者となり、対露非戦を説き退社。平民社を創設、週刊「平民新聞」を発刊。筆禍事件で入獄後、渡米。無政府主義に傾き大逆事件の首謀者として死刑に

- ▽幸徳 木下ら社会主義者が 支援に立ち上がり  
現地調査 救援を訴える演説会が 開かれた
- ▽政府も 内閣に 鉱毒調査会を設け  
足尾銅山には 鉱毒予防工事の 実施を命令

最後まで闘い続けた田中

洪水緩和対策として、渡良瀬川と利根川の合流点に近い谷中村(栃県)を取り潰し、遊水池にする計画を立てた。田中は「これは政府のペテンだ。鉱毒問題を治水問題にすり替え、世間の目をごまかそうとするものだ」と反対したが、村民は長年の闘争に疲れ果てていた。

田中は戸数450戸ばかりの小さな村に掘っ立て小屋を建て、闘争を続けたが、廃村を宣告された村民はわずかな買収費で村を去っていった。最後まで抵抗した19戸も、40年7月、法律の名で強制撤去された。

田中は資金カンパの旅の途中胃ガンで倒れ、大正2年9月4日亡くなった。遺品は菅笠と頭陀袋、3冊の日記に聖書が1冊と鼻紙少々。栃木県佐野町で行なわれた葬儀には、腰弁当、わらじがけで沿岸5万の人が参列したという。遺骨は農民の希望で沿岸5か所に分骨、埋葬された。

- 日清戦争(贈27年8月1日)勝利に、国民は沸いた
  - ▽一日に何回も 号外が出て 号外売りの新商売  
「号外、号外。局面一変の号外、  
危機一髪の号外」と叫びながら 駆け回った
  - ▽川上音二郎は 浅草座で「壮絶快絶日清戦争」  
38日間 連日 大入り満員の札止め  
戦地を見て「川上音二郎戦地見聞日記」
  - ▽歌舞伎座から ドサ回りの村芝居まで  
演目を 歌舞伎十八番から 戦争劇に切り替え

- 三国干渉(贈28年4月23日)に、国民は泣いて怒った
  - ▽5月10日「遼東半島還付」の詔勅
  - ▽随筆家 生方敏郎(贈小教5年)は「私たち小学校生徒でも先生やお父さんと一緒になって泣くほどに遼東還付を口惜しがった。どこのお母さんや娘さんも皆大いに口惜しがったものだ」(明治大正見聞記)

幸徳と中江兆民

幸徳は生まれた翌年、酒造業を営んでいた父親を亡くし貧苦の中で育った。子供の頃から自由民権に共鳴し、保安条令の追放令に引っ掛かった一人。その際、「東洋のルソー」といわれた同郷の中江兆民の書生として住み込み、多大な影響を受けた。兆民のことを「先生の文はほとんど神品。筆はまた飛ぶようだった。天馬空をゆくとはあのことであろう」と書いている。「秋水」の号も、かつて兆民が使っていた号を与えられたもの。

中江 兆民(なかえ・ちやうみん)

弘化4(1847)～明治34(1901) 土佐藩出身。明治4年仏国留学。ルソーの「民約訳解」など自由主義思想の啓蒙に努める。23年衆院議員に当選するが民党の墮落に憤激し翌年辞職。喉頭ガンで余命1年有余と告げられ、「一年有半」「統一年有半」を執筆、「民権至理也」と叫び続けた

..... 新聞も競って戦地へ特派員 .....

68社、114人を派遣、9人が殉職。従軍記者には軍の支援、特典はなく、移動も全て自前。服装も思い思い、袴姿に草履ばきも。民権運動の壮士上がりが多く、仕込み杖に長槍を抱えている者もいて、大阪朝日の特派員は「赤穂浪士の討入り前夜を思わせた」と伝えている。

悩みは、軍の秘密主義から報道に協力的でないこと。宣戦布告と共に、勅令で外交・軍事の報道は全て事前検閲。新聞「日本」は「戦報を秘するは唯だ軍機に関する部分のみを秘すべくなり。軍機に関せざるものまで秘するは是れ国民を盲にするものなり」と批判している。

▽新聞「日本」は「詔勅下る」として

「苟も血あるもの誰か泣て之を奉読せさらんや」

▽三宅雪嶺が唱えた「臥薪嘗胆」を載せ(15冊編)

「我国は建国以来他の侮蔑を被りしこと無く、人皆愛国心に富み夢裡尚ほ外邦の検束を受けんとはせざるなり」 政府攻撃で発行停止(26日まで)

▽全国で30社以上が「治安妨害」で発行停止

新聞「日本」は日清戦争前後を通じ

22回131日間も 停止処分を受けた

▽「臥薪嘗胆」は 国民決意の合言葉となっていた

#### 臥薪嘗胆

中国春秋時代(BC770~BC403)、呉王夫差(ふさ)が越王勾踐(こうせん)を討って父の仇を報じようと常に薪の中に寝て身を苦しめ、勾踐を破る。敗れた勾踐は、その恥を雪ごうと、苦い肝を嘗めて報復を忘れないようにし、ついに夫差を滅ぼした故事による。

#### ●この内務大臣の処分権が廃止された

▽明治30年3月24日 新聞紙条令改正で

#### きっかけは「松隈内閣」成立(29年9月22日)

松方正義首相にとって、日清戦争後の戦後経営、ことに對露外交が焦点であり、外交に詳しい大隈重信に外相就任を要請した。大隈率いる立憲進歩党は議員103名を擁し、大隈が入閣に出した条件が、進歩党の立場に立った言論、集会、出版の自由を認めること、具体的には新聞発行停止権の廃止だった。

▽条令改正で 内相の発行禁止・停止条項は廃止

発行禁止は 裁判によって 決定されることに  
しかも 法に触れた日の新聞だけの

発売・頒布禁止に留まり これが 大きかった

#### ●機敏に反応した涙香、「言論重視」の紙面作りへ

▽日本の知性を代表する論客を 入社させた

キリスト者の内村鑑三

社会主義者の幸徳秋水 堺枯川 石川三四郎

作家の斎藤緑雨 東洋史の内藤湖南

川上 音二郎(かかみ・おとじろう)

元治1(1864)~明治44(1911) 福岡県生まれ。自由党员となり、政府攻撃の政談演説、オッペケペー節で人気を博した。壮士芝居に刺激され明治24年川上書生芝居を旗揚げ、新派劇の草分けに。日清戦争で戦争劇を上演、川上座を開場。32年妻貞奴と欧米を巡業した。また41年、帝国女優養成所を開くなど日本の近代劇運動の先駆的役割を果たした

松方 正義(まつかた・まさよし)

天保6(1835)~大正13(1924) 薩摩藩出身。明治14年から16年間大蔵卿・蔵相を務め、日銀創設、兌換銀行条令制定など財政の基礎を作る。24年、29年首相

内村 鑑三(うちむら・かんざう)

文久1(1861)~昭和5(1930) 江戸生まれの高崎藩士の子。明治10年札幌農学校2期生としてキリスト教入信。17年渡米、アーモスト大で学び、第1高等学校講師の時、不敬事件で退職。30年万朝報に入社、日露開戦に非戦論を主張し退社。自宅で聖書研究会を開き、門下生から前田多門、安部能成、田中耕太郎、森戸辰男、天野貞裕と戦後の文相5人、矢内原忠雄東大総長が出た

堺 枯川(さかい・こせん)

明治3(1870)~昭和8(1933) 福岡県生まれ。明治32年万朝報入社。非戦論を展開し退社、幸徳と平民新聞発刊。大正11年共産党創立に参加。終始、社会主義者の組織化と纏め役を果たした

石川 三四郎(いしかわ・さんしろう)

明治9(1876)~昭和31(1956) 埼玉県生まれ。明治35年万朝報入社。翌年平民社に入りキリスト教社会主義の立場をとる。筆禍事件で入獄、無政府主義に傾く

●内村が、なぜ「赤新聞」に入ったのか？

▽大学予備門(兼縮訳科)在学中

10年6月に札幌農学校へ転校

▽没落士族の長男 弟妹4人を抱え

肋膜炎で1年間休学したばかり

官費の学校 北海道の新天地は 魅力だった

▽クラークの教育方針は 人間教育

生徒(16人)にも「自主自行」自主精神を大切に

▽こまごまとした校則も

学年・学期の始業と終業日 授業時間と

放課後4時間の予習だけ 後はなくした

「Be Gentleman!」(紳士であれ)で 十分だと

▽一期生全員が「イエスを信ずる者の誓約」に署名

▽内村たち 二期生を待っていたのが

一期生(瀧の尾)による 猛烈な 入信への勧め

▽最後まで 抵抗した内村

札幌神社の神前に 額づいて

「農学校にはびこる異国の神の撲滅」を 祈った

●内村の生涯を貫くバック・ボーン

▽卒業に当たり 予備門以来の二人の親友

宮部金吾 新渡部稲造と立てた

「二つのJへの誓い」Japan Jesus

..... 新渡部の「武士道」(明治32年7月刊)出版) .....

「THE SOUL OF JAPAN」(日本の魂)と副題のついた

この本は、「武士道はその表徴たる桜花と同じく、日本の土地に固有の花である」という書き出しで始まり、義、勇、仁、礼、誠、名誉など武士道

の特質について、歴史的な実例を挙げて「日本とは何か、日本人とは何か」に、答えている。

ベルギーの大学教授に「宗教教育をしていない日本で、どうやって道徳教育を授けるのか」と聞かれて、新渡部は一瞬答えられなかった。

しかし、自分の道徳観念は、南部藩武士の家に生まれ、武士道の中で育まれたものだ、と気が付いて、この本を書いたという。

感動した時の第26代米大統領セオドア・ルーズベルト(1858~1919)が陸軍士官学校に寄贈、日本理解の教科書として使わせたという。

.....

斎藤 緑雨(さいとう・りよく)

慶応3(1867)~明治37(1904) 三重県生まれ。本名賢(まさる)。今日新聞、万朝報などで小説、毒舌評論、随筆で鳴らした

内藤 湖南(ないとう・こなん)

慶応2(1866)~昭和9(1934) 秋田県生まれ。本名虎次郎。大阪朝日、万朝報記者として活躍後、明治40年京大講師。東洋史学を担当し、42年~大正15年教授

クラーク(William Smith Clark)

1826~1886 慶応3年マサチューセッツ農科大学学長となり、明治9年6月、北海道開拓使に招かれ札幌農学校教頭として同校の創設に当たる。在任8か月だったが多くの人材を育てた。帰国に際し、生徒に「Boys, be ambitious!」(少年よ大志を抱け)の言葉を残した

札幌農学校

北海道大学の前身。北海道開拓には農業教育が必要と、ケプロン(政府顧問、元農務局長)の献策で黒田清隆(北海道開拓使)が明治5年芝・増上寺に開拓使学校として開設した。8年札幌に移し、9年農業教育専門機関として札幌農学校と改称した。

クラークが横浜へ着くなり、真っ先に買い求めたのが30冊の英語の聖書。北海道へ渡る船の中で黒田が教育方針を尋ねたところ、「キリスト教の精神以外に教えるべき道徳はない」。黒田は再考を迫ったが譲らず、結局「内緒でやってくれ」となり、官立の学校としては例のないキリスト教教育の学校となった。

宮部 金吾(みやべ・きんご)

万延1(1860)~昭和26(1951) 江戸生まれ。明治22年北大教授、在職46年間に及ぶ。北海道未開地を踏査、日本の植物病理学の基礎を築く。昭和21年文化勲章

▽内村も「自分の場合、武士道という精神的土壌、その台木にキリスト教が接ぎ木された」

#### 山路愛山を感動させた内村の講演

「明治廿二年の天長節において、余は麻生の東洋英和学校において内村氏の講演を聞きたり。当時彼は、その演壇を飾れる菊花を指して曰いき。この菊花は自然が特に日本を恵みたるものの一なり。菊は実に日本に特有する名花なりと。彼は更に声を揚げて曰く。諸生よ、窓を排して西天に聳ゆ富嶽を見よ。これまた天の特に我国に与えたる絶佳の風景なり。されど諸生よ記せよ。日本において世界に卓絶したる最も大なる不思議は実に我皇室なり。天壤と共に窮りなき我皇室は実に日本人民が唯一の誇りとすべきものなりと、その肅々たる態度とその誠実をあらわして余りある容貌とは深く聴者の心を動かしたりき」(註釋論より)

▽山路は「愛国者だ。しかも純粋の日本人だ」そして「不思議なことに、

その人が保守反動の犠牲になった」

▽内村は「不敬事件」で 第一高等中学校を辞職

#### ● 涙香は名古屋に内村を訪ね、入社を懇請した

▽内村は 万朝報の看板が 人身攻撃であることにとめらいを見せ 非難もした

「日本の社会が墮落の極に達し、絶望している」

▽涙香は 引き下がらない 「まだ少しは改革の見込みがある。絶望するには早過ぎるし、しばらく新聞記者の立場から社会を見てみませんか」

▽内村が 入社を承知したのは

ペンを通しての キリスト教伝導に期待

「万朝報は、農民、職人、労働者など

いわゆる下流社会の人によく読まれる新聞」

▽万朝報は 一面トップ(30年2月14日附)で

特大の活字を使い「内村鑑三氏入社」

「農学士内村鑑三氏は今回当社の請を諾し、来りて朝報の編輯局に入れり、…朝報はこれを機として紙上又更に幾多の刷新を加へ、進で止まざるの精神を発揮せんとす」

#### 新渡部 稲造(にとべ・いなぞう)

文久2(1862)～昭和8(1933)盛岡南部藩出身。明治24年札幌農学校教授、京大教授を経て39年一高校長。大正7年東京女子大総長。9年国際連盟事務局次長となり、カナダ出張中に病没。著に「武士道」

#### 山路 愛山(やまじ・あいざん)

元治1(1864)～大正6(1917)江戸生まれの幕臣の子。本名弥吉。明治25年国民新聞記者、32年信濃毎日新聞主筆。36年個人雑誌「独立評論」を創刊、史論を発表

#### 教育勅語(贈23年10月30日発)

明治天皇の名で国民道徳の根源、国民教育の基本理念を示した勅語。御真影と共に天皇制教育推進の支柱となり、国の祝祭日に奉読が義務づけられた。昭和23年廃止。

#### …… 内村の「不敬事件」 ……………

7つの高等中学校には天皇の署名入り勅語が授与され、1高では24年1月9日の始業式に奉読式を行なった。奉読の後、演壇の勅語の前に教員、生徒が進み、天皇の署名に敬礼することになったが、教員の内村は、一瞬ためらい、結果的には深いお辞儀をしないまま降壇した。

これが「天皇に対する不敬だ」と、大問題になった。一部の教員、生徒が内村の家に押し掛け、投石する者も出た。内村は言っている。「天皇が国民に勅語を賜ったのは、敬礼させるためではなく、日常生活で心に留め忘れさせないためではないか」。仏教系の雑誌が「国賊だ」と罵るに至って、内村は辞職した。

#### —— 内村入社の反響は大きかった ——

内村の担当は、学生読者のための英文欄主筆。立教中学2年の河上丈太郎は、「この英文欄を読みたくて」

▽かつての「赤新聞」は

若い読者層を開拓し 進歩的な論説により  
知識層にも 影響を与える新聞に

▽それでも 涙香は 三面記事で

パンチをきかせる姿勢は 変えなかった

▽内村が「いい加減に人身攻撃を止めたらどうか」

涙香は「先生、正しくないことをやる人を見逃すのは、社会全体の不幸です。これを攻撃し、責めるのは当然の権利です。これだけは許していただきたい」

▽涙香は 内村や幸徳の論説には

一切 注文をつけず 自由に 腕を揮わせた  
この姿勢が 万朝報を 非戦論 反戦論の舞台に

●明治36年に入ると、満州をめぐる日露情勢が緊迫

▽ロシアは 義和団事件(33年6月)の混乱に 乗じて

満州を占領し そのまま 居座ってしまった

▽陸軍大臣クロパトキン

「皇帝ニコライ二世は、満州を占領し、さらに  
進んで朝鮮を併合することを望んでいた」

▽日英同盟(35年1月30日)が 圧力になり

ロシアは 35年4月8日

清国との間に「満州還付条約」を調印した

- ・第1期(35年10月8日まで) 奉天省西南部から
- ・第2期(36年4月8日まで) 奉天省残り と 吉林省
- ・第3期(36年10月8日まで) 黒竜江省から 撤兵完了

▽ところが 第1期撤兵こそ 実行したものの

36年4月になっても 撤兵しないどころか  
朝鮮国境の 鴨緑江沿岸にまで 進出してきた

●国内は「横暴なロシアを許すな」と開戦論が盛んに

▽貴族院議長近衛篤磨は 6月10日

東大7博士(小野嘉喜平次 金井延 高橋作衛 寺尾亨 戸水寛人 富井政章 榊澣)と共に 桂太郎首相に 強硬意見書

「最後の決心をして、極東平和を

永久に保持する策を示せ」

▽陸海軍・外務省中堅幹部15人は

新橋の料亭湖月楼に集まり「湖月会」を結成  
陸軍=井口省吾(参謀本部総務部長) 松川敏胤(同作戦部長)  
海軍=秋山真之 外務省=山座円次郎(政務局長)

横須賀海軍造船工廠で日給27銭、15歳の少年工だった荒畑寒村は、「内村の社会批判を読みたい一心で」

河上 丈太郎(かかみ・じょうろう)

明治22(1889)～昭和40(1965)東京生まれ。関西学院大教授を経て、昭和3年第1回普選に日本労農党から当選(選挙10回)。27年右派社会党委員長。35年、国会でテロに遭い、重傷を負う。36年から40年まで社会党委員長

荒畑 寒村(あらかた・かんそん)

明治20(1887)～昭和56(1981)横浜生まれ。高小卒業後、明治35年キリスト教の洗礼を受け、海軍造船工廠見習工に。37年平民社に入り社会主義伝導行商を行なう。赤旗事件、人民戦線事件で入獄。戦後、社会党結成に参加、昭和21年衆院議員。23年離党後評論活動に入る

クロパトキン(Aleksey Kuropatkin)

1848～1925 ロシアの将軍。陸軍大臣を経て日露戦争で極東軍総司令官となったが、奉天会戦で大敗し解任される

近衛 篤磨(このゑ・あつ磨)

文久3(1863)～明治37(1904)京都生まれ。明治29年貴族院議長。日清同盟論を展開、31年東亜同文会を結成。33年南京同文書院を設立。36年対露同志会結成、主戦論を主張した。文磨は長男

桂 太郎(かづら・たろう)

弘化4(1847)～大正2(1913) 長州藩出身。陸軍大将。陸相を経て明治34年首相となり、日英同盟を締結、日露戦争を遂行した。41年再び首相。42年内大臣兼侍従長。大正1年3度首相、護憲運動が起こり、大正政変で2か月で辞職

……「湖月会決議」(36年5月29日) ……………

帝国は今の時を以て一大決心をなし、戦争を賭して露国の横暴を抑制するに非ざれば、帝国の前途憂慮すべきものあり。而して今日の機会を失しては将来決して国運回復の機に合せざるべし 但しこの決議は、ただ各自一身の覚悟を決するための研究に止まらしめて、政治運動をなすべきために非ず。

▽参謀本部は 6月8日 首脳会議  
井口・松川両部長は 強硬な開戦論を主張したが  
大山巖参謀総長は ただ一言  
「ロシアな、大国でごわんど」 退席した

▽井口は 日記に書いている  
「桂総理大臣の決心確乎ならず、優柔不断遂に国家の大事を誤らんことを恐る。加うるに山県元帥の意気銷沈して、また昔日の慨なし…大山参謀総長もまた戦意なく、しかのみならず陸海軍協和を欠き、陸海両大臣、なかんずく山本(麒衛)海軍大臣、海軍あるを知りて、国家あるを知らず、機を見るの明なく、戦を決するの断なし。帝国の大事まさに去らんとす」

●新聞界で開戦論の急先鋒は朝日(勲・煇)  
▽時事新報 国民新聞 東京日日も 開戦を主張  
▽万朝報では まず 幸徳が  
「開戦論の流行」と題して 7博士を非難  
「兵は凶器であり、戦争は罪悪である。  
単純な愛国論に惑わされるな」  
▽内村の「戦争廃止論」は 6月30日付万朝報に

●世論は、いつも威勢のいい方に立って騒ぐ  
▽「戦争をするな」という 万朝報は  
みるみる 部数が減って 10万の大打を割った  
▽10月8日(ロシアの最後の艦隊) 開戦論に転じた  
「戦は避く可からざるか」の見出しで  
「猛然として最後の決断すべき日が来た」  
公約が 守られない以上  
平和への努力も 限界にきた  
▽内村 幸徳 堺の3人は 退社した

井口 省吾(いぐち・しやうご)  
安政2(1855)～大正14(1925) 静岡県生まれ。陸軍大将。陸大教官を経て日露開戦時の参謀本部総務部長。明治37年6月満州軍高級参謀。のち軍事参議官

秋山 真之(あきやま・まゆき)  
慶応4(1868)～大正7(1918)伊予松山藩出身。海軍中将。明治36年10月連合艦隊作戦参謀となり日本海開戦でバルチック艦隊を破る。大正3年軍務局長

山座 円次郎(やまざ・えんじろう)  
慶応2(1866)～大正3(1914)福岡市生まれ。外務省に入り明治34年政務局長。ポーツマス講和会議に随行。大正2年中国公使となり、北京で死去

大山 巖(おおやま・いわ)  
天保13(1842)～大正5(1916)薩摩藩出身。陸軍大将・元帥。明治10年陸軍卿。18年陸相となり日清戦争で第2軍司令官。34年参謀総長に就任、日露戦争で満州軍総司令官。大正3年から内大臣

内村の「戦争廃止論」

「余は日露非開戦論者である許りでない、戦争絶対的廃止論者である、戦争は人を殺すことである、爾(そ)うして人を殺すことは大罪悪である、爾うして大罪悪を犯しても個人も国家も永久に利益を収め得やう筈はない…戦争廃止論は今や文明国の識者の世論となりつゝある、爾うして戦争廃止論の揚らない国は未開国である然り、野蛮国である、余は不肖なりと雖も今の時に方て此声揚げて一人なりとも多くの賛成者を此大慈善主義のために得たく欲う、世の正義と人道と国家を愛する者よ、来て大胆に此主義に賛成せよ」

▽涙香は 3人の「退社の辞」を 万朝報に載せた

内村の「退社に際し涙香兄に贈りし覚書」

「小生は日露開戦に同意することをもって日本国の滅亡に同意することと確信致し候。然りとて国民挙て開戦と決する以上は、これに反対するは情として小生の忍ぶ能わざるところに御座候。然りとてまた論者として世に立つ以上は、確信を語らざるは志士の本分に反くことと存じ候。殊にまた朝報にして開戦に同意する以上は、その紙上において反対の気味を帯ぶる論文を掲ぐるは、これまた小生の為すに忍びざるどころにして、また朝報が世に信用を失うに至るの途と存じ候…」

▽涙香も 自ら筆をとり「送別の言葉」

「朝報社にもし光明ありとせば、内村、幸徳、堺三君のごときはその中心なり。今や三君、対露問題の国是論において、社中と意見の合せざるところあるがために、時を同じくして朝報社を去る。…もし朝報の声価と信用とに至りては三君の去るがために、失うところの甚だ少からざるを恐る。…別れに臨みて三君の健康を祈る」

●再び厳しい言論統制の時代に逆戻りするの、「日比谷焼き打ち事件」がきっかけだった

▽ポーツマス講和会議開催(38年8月10日)が決まると

東大7博士は 政府に意見書

「賠償金30億を取れ

樺太、カムチャッカ、沿海州を取れ」

▽国中が 勝利の分け前を 要求する気分

そこへ30日 各新聞が 交渉成立の内容

「賠償金なし、樺太の南半分だけ」

●新聞は「屈辱講和」と大反対

▽ただ1紙 国民新聞は

講和受諾を「現実的な選択である」

▽蘇峰は「この大戦争を無限に続けることは、物事の道理の上からも出来っこないことだ。日本の真の目的は平和保持にあり、この講和で日本の主張は貫徹出来た」桂内閣を支持 講和に賛成

…… 内村、海軍勝利に思わず「万歳」 ……

日露開戦は37年2月8日、駆逐艦隊の旅順口夜襲で始まった。戦艦2隻巡洋艦1隻を大破させたことが伝わると、内村は万歳を三唱してしまった。1高時代の教え子で朝報で一緒に机を並べていた山県五十雄(やまがた・いそお)に英文の手紙を出している。

「親愛なる五十さん このたびの海軍の勝利は、君が最近抱かれた平和主義を覆しましたか。君は大丈夫だろうと思います。この勝利は多年にわたる陸戦を招き、国家の資源を枯渇させてしまうだろうと、小生は想像し予見しているのです。とはいえ、小生の昔ながらの愛国心は、今日わが海軍のロシア海軍に対する勝利の報に接するや、小生を完全に支配してしまいました。そして小生は隣近所全体に聞こえるほどの大声で、「帝国万歳」を三唱したのです。私はまたなんと矛盾した人間なのでしょう」

山県には1週間前、男の子が生まれ、内村は祝いの手紙を送って、「考えてもごらん下さい。このような男の子が両親の愛情に育てられて育ち、自国の利益を守らなければならぬというだけの理由で、ロシア兵の銃弾に倒れなければならないとするならば」

「講和反対」の大合唱

煽動「我等国民、伏して願はくは、陛下が陛下の聖意にあらざる和約の未だ調印せられざるに及びて、破棄を命じ、閣僚を更迭し、更に督良に命じて内閣を組織せしめ、重ねて軍人に命ずるに進戦を命じ給はんことを」  
旗幟「帝国の光栄を抹殺し、戦勝国の顔に泥を塗りたるは我が全権なり、我が国民は断じて彼の帰朝を迎ふる勿れ。これを迎ふるに弔旗をもって

▽東京朝日が「穢(けが)らはしき御用新聞」と  
名指して非難 国民新聞は 民衆から目の敵に

●講和条約締結の9月5日、日比谷公園では「講和反対  
国民大会」(講和問題連合同志会主催)

▽河野広中(衆議院)ら 主催者側の思惑を 越えた

▽紙製の軍旗に 黒リボンをつけた弔旗

5千本用意したが 3万の群衆が 公園を埋めた

..... 予兆はあった .....

東京のあちこちで、電柱に「講和反対」のビラ  
が貼られ、芝では子供たちが紙製の白旗を手  
に「日本負けた、日本負けた」と行進。大阪市民  
大会(3日)は中之島公会堂で3千人を集め開か  
れたが、白張提灯と白旗を高く掲げ行進した。

▽警視庁は 早朝から 警察官350人で厳戒態勢

6つの入口を 丸太で封鎖 集会禁止命令

▽群衆は 午前11時頃から 集まり出し

丸太を乗り越え 公園内に だれれ込んだ

▽読売新聞は「其の数無量十万!!」

紳士あり 印紳天あり 書生あり 老人あり

小兒あり 婦人あり 眼は血走れり

彼等の面貌には 殺気満ち充てり」

▽大会は 20分ほどで 終わったが

群衆が 交差点に 丸太を積み上げ

市電は 完全に ストップ

▽国民新聞社襲撃は 5千人ほどの 投石で始まった

▽窓ガラスは 全て 割られ

活字ケースが引っ繰り返され 輪転機も破壊

▽世論におもねず 毅然と 抵抗した蘇峰

●6日夜には近衛師団出動、戒厳令が布かれた

▽騒乱が どうにか収まったのは 7日夜

報知新聞は 号外で「殺気天地に満つ」

▽警察側負傷502 群衆に死者17

怪我人は 2千とも3千とも

▽交番の焼失・破壊 364か所 交番の8割

「国民に真相を報せなかった政府が悪い」

こう書いている歴史学者が多いが、果たして  
そうだろうか — 確かにロシアは革命の火種

せよ。彼の帰朝の日は市民はいっさ  
い閉戸して顔を彼に背けよ」

鳩輔「ああ死体的講和、よろしくま  
さに弔旗を掲げ、喪服を着けてこれ  
を迎ふべし」

新聞への投書には「樺太の半分取っ  
て樺の字をロシアから読めばバカと  
なるなり」ロシアの全権ウイッテを  
もじって、「戦争に負けて談判で大勝  
利を得た敵の全権は遺(すま)に小村  
寿太郎(日全権)よりウワッテだ」

河野 広中(こう・ひろなか)

嘉永2(1849)～大正12(1923) 福島・三春  
藩郷土の子。戊辰戦争で藩論を動かし、  
官軍を支持、参謀の板垣退助を知る。明  
治14年福島県会議長。土木工事に反対、  
「福島事件」を起こし軽禁固7年。23年衆  
院議員(選14回)。36年衆院議長。日比谷  
焼き打ち事件で検挙されたが証拠不十  
分で釈放。大正4年大隈内閣農商務相

—— 新聞で参加呼び掛け ——

一、9月5日午後1時より日比谷公園に  
於て全国国民大会を開く同志八何人も  
参会差支なし

一、右大会終りて同2時より京橋区新

富町新富座に於て政談演説会を開く

一、右演説会終て同所に於て大懇親

会を催はず(懇親会費20銭)

—— 蘇峰の言葉(蘇峰自伝から) ——

唯だ会心の一事は、その翌日はともか  
くも新聞を出すことが出来たことであ  
った。吾社の新聞には暴徒襲来などと  
掲げて、あくまで当時の輿論に挑戦し  
た。…予は飽迄ポーツマス条約の止む  
べからざるを信じたが為に、如何なる  
危険に瀕するも、極めて快活に、且つ愉  
快なる態度を以て接した。

を抱え、講和に応じた最大の理由だったが、もし、日本の国力が底をつき、戦争継続の能力がないことを知っていたら、当然、あと一押ししていたろう。現にロシア軍は、ヨーロッパから30万の精鋭部隊をハルピンに集結中で、いつでも戦闘を再開できる態勢を整えていた。

▽むしろ問題は新聞だった

▽政府が隠しても知る努力をすべきだった  
冷静に周りを見渡せば

国力の限界はわかったはずだ

●戒厳令と同時に、緊急勅令で内相の処分権発動

▽全国で39の新聞・雑誌が処分された

東京朝日は14日間

大阪朝日に至っては3回延べ39日間

▽解除(11月29日)でホッとしたのも東の間…

●42年5月6日、新聞紙法公布、内相の処分権復活

▽「安寧秩序」は政変から

次期内閣の予想記事にも適用された

役人の解釈一つ どうにでも使える「万能の剣」

▽法案審議には地方新聞経営者が8人も

●政府の狙いは社会主義の規制

▽幸徳と堺は週刊「平民新聞」発刊(36年11月15日)

▽政府の6千万円増税案に「嗚呼増税！」(3月27日)

「嗚呼『戦争の為め』ちょう語は、有力なる麻醉剤なる哉。嗚呼六千万円の増税、苛重なる増税よ、是実に『戦争の為め』なるべし。然れども如何に戦争の為めなりとて、之を負担する国民の苦痛は、依然として苦痛ならざる可からず」

▽発禁に発禁が重なり 38年1月29日号で廃刊

▽陸軍大臣寺内正毅は師団長会議(39年)で

社会主義を「病毒」と決め付け

「軍部にいささかなりとも侵入を許さず」

▽「軍部」という言葉が初めて使われた

それまでは軍人社会一般を指して「軍界」

「軍部」が政治的意志を持つようになり

軍の意向に従わないと何も出来ない日本に

「寸足らずの兵隊さん」

こんな見出しの記事が出ている。戦争の激化で、予備役、後備役を動員しても兵隊が足りない。陸軍は奉天の戦いが終わると(38年3月)、徴兵検査の合格基準をぐんと下げた。兵種によっては4尺9寸(1m48cm)、つまり5尺に寸足らずでも合格とした。

緊急勅令(9月6日発)

第1条 新聞紙マタハ新聞紙条令ニヨル雑誌ニシテ、皇室ノ尊厳ヲ冒瀆シ、政体ヲ変壞シ、モシクハ朝憲ヲ紊乱セントスル事項、マタハ暴動ヲ教唆シ、犯罪ヲ煽動スルノ虞リアル事項ヲ記載シタルトキハ、内務大臣ハソノ発売、頒布ヲ禁止シ、コレヲ差シ押エ、カツ以後ノ発行ヲ停止スルコトヲ得

新聞紙法(45条)

第23条 内務大臣ハ新聞紙掲載ノ事項ニシテ安寧秩序ヲ紊シ又ハ風俗ヲ害スルモノト認ムルトキハ其発売又頒布ヲ禁止シ必要ノ場合ニ於テ之ヲ差押フルコトヲ得

保証金として、東京市、大阪市、その市外3里以内の地は2千円、人口7万以上の市と区、1里以内の地は千円その他の地方は500円。違反した場合には禁固2年以下または罰金500円以下。

寺内 正毅(てらうち・まさたけ)

嘉永5(1852)～大正8(1919) 長州藩出身。陸軍大将・元帥。西南戦争で負傷、軍政面を歩む。教育総監、陸大校長を経て明治35年桂内閣陸相。43年朝鮮総督。大正5年首相に就任、シベリア出兵を強行し、米騒動で総辞職に追い込まれる。長男寿一は太平洋戦争の南方軍総司令官